

学位論文要旨

図画工作科の鑑賞教育における

想像力を育む学習指導の開発

—探究的な対話と模写を取り入れた絵画鑑賞を通して—

広島大学大学院教育学研究科
学習開発専攻
D144019 國清 あやか

論文題目 図画工作科の鑑賞教育における想像力を育む学習指導の開発
—探究的な対話と模写を取り入れた絵画鑑賞を通して—

論文目次

序 章 研究の背景と研究の目的

第1節 問題の所在

第2節 研究の目的と方法

第1章 想像力を育む学習指導に関する先行研究の検討

第1節 「DBAE論」に関する先行研究

第2節 「想像力」に関する先行研究

第3節 「対話型鑑賞」に関する先行研究

第4節 「模写と創造」に関する先行研究

第5節 問題提起と本研究の独自性

第2章 理論的枠組み

第1節 ヴィゴツキーの創造的想像力と鑑賞教育において育む想像力

第1項 ヴィゴツキーの創造的想像力

第2項 鑑賞教育において育む想像力

第2節 鑑賞教育において想像力を育む学習指導の理論

第1項 鑑賞教育において想像力を育むための模写の活動

第2項 模写を取り入れた学習指導方法

第3項 探究的な対話型鑑賞を取り入れた学習指導方法と鑑賞題材

第3章 研究デザイン

第1節 研究方法

第1項 アクション・リサーチの方法

第2項 研究仮説

第2節 フィールドと対象者

第1項 研究協力校のデータ

第2項 研究協力者と児童の実態

第3節 データ収集の方法

第1項 プレテスト・ポストテストの実施

第2項 ワークシートや発話記録の収集

第4節 データ分析の方法

第5節 信頼性と妥当性

第6節 研究倫理

第7節 本研究の範囲と限界

第4章 鑑賞教育における想像力の評価指標

第1節 評価指標の作成方法

第2節 記述内容の質的分析

第1項 プレテスト・ポストテストの記述分析による児童の特徴

第2項 ワークシートの記述分析による児童の特徴

第3節 評価指標の作成

第5章 絵画作品の鑑賞を中心とした題材を用いた学習指導の開発

第1節 予備研究

第1項 予備研究のデザイン

第2項 データ分析

第3項 考察

第2節 研究1 ―広島大学附属小学校におけるアクション・リサーチ―

第1項 低学年におけるアクション・リサーチ

第2項 データ分析

第3項 考察

第4項 中学年におけるアクション・リサーチ

第5項 データ分析

第6項 考察

第7項 高学年におけるアクション・リサーチ

第8項 データ分析

第9項 考察

第3節 研究2 ―公立小学校におけるアクション・リサーチ―

第1項 低学年におけるアクション・リサーチ

第2項 データ分析

第3項 考察

第4項 中学年におけるアクション・リサーチ

第5項 データ分析

第6項 考察

第7項 高学年におけるアクション・リサーチ

第8項 データ分析

第9項 考察

第6章 総合考察

第1節 想像力の発達段階

第2節 想像力の質的向上を図る学習指導法

終章 研究の成果と今後の課題

第1節 本研究の成果

第1項 鑑賞教育において育まれる想像力の発達段階

第2項 鑑賞教育における想像力の質的向上を図る学習指導法

第2節 本研究の今後の課題

第1項 想像力の発達段階についての課題

第2項 学習指導法についての課題

資料

あとがき

論文要旨

1 研究の背景と研究の目的

IT や通信技術をはじめとした技術革新により、我々の生活は飛躍的に便利になった。その反面、自ら「体験する」「考える」「想像する」という行為を停滞させてしまうおそれもあるのではないだろうか。自らの体験に基づき物事を相手の立場に立って考え行動することのできる思いやりの心を育てるためには、想像力を育むことが必要である。

図画工作科の学習指導要領では、想像力の育成を目標として掲げているが、従来の題材においては、発想や構想の中に児童の想像力の働きを見て取るものがほとんどであり、自己の生き方を見つめ、生きる意味や価値を新しく創り出すことに関わる想像力の育成をねらいとした題材の開発が未だ多くなされていないことが課題である。

本研究では、想像力の働きに着目し、自己の生き方を見つめ、生きる意味を新しく創造することのできる想像力を育むための学習指導法を鑑賞教育の実践によって開発することを目的とする。

2 想像力を育む学習指導に関する先行研究の検討

先行研究を検討すると、図画工作科において、想像力の捉えは曖昧で、評価基準が不明確な報告が多く、効果が十分に検証されているとは言いがたい。そこで本研究では、鑑賞教育において育むべき想像力を明確化し、想像力を育む学習指導法を開発することにした。

カリキュラム開発においては、デューイの教育思想に基づくアイズナーの DBAE (Discipline-Based Art Education) 論を踏まえ、学習者個人の価値観や経験を活かし、学習者の想像力によって経験の質を豊かにし、新しい価値観を再構築するために、児童の生活経験と学問分野の本質的な内容と方法とを結びつけた授業設計を考えた。

鑑賞学習の重視が学習指導要領の改訂の指針としてあげられ、鑑賞領域への関心の高まりとともに、学習課題に即して児童の学びを促し、児童自ら作品の意味を生成する対話型鑑賞法の研究が進められている。しかし、作家の精神世界や作品の主題と児童の経験を結びつけて、児童が生きる意味を新たに創造することのできる対話型鑑賞法の実践が充分なされていないとは言いがたい。本研究では、模写の教育的意義を考察し、対話型鑑賞法に模写の活動を導入し、作家の創造活動における思考プロセスを体験することを通して想像力を育むための学習指導法を開発した。

3 理論的枠組み

(1) 鑑賞教育において育む想像力

芸術と子どもの日常を結びつけ経験を広げるための鑑賞教育の重要性を述べているヴィゴツキーの想像力の知見を援用し、図画工作科の鑑賞教育において育むべき想像力を、以下のように定義し、発達の構造を図1に表した。

自分自身の過去経験を基に、作品の客観的な造形的特質に基づいて作品に感情移入したり、情動的思考を働かせて、ただ単に目に見えて現れている形象ではなく、作家の精神世界や作品の主題を想像したりすることを通して、自己の生き方を見つめなおし、生きる意味を新しく創造する想像力。

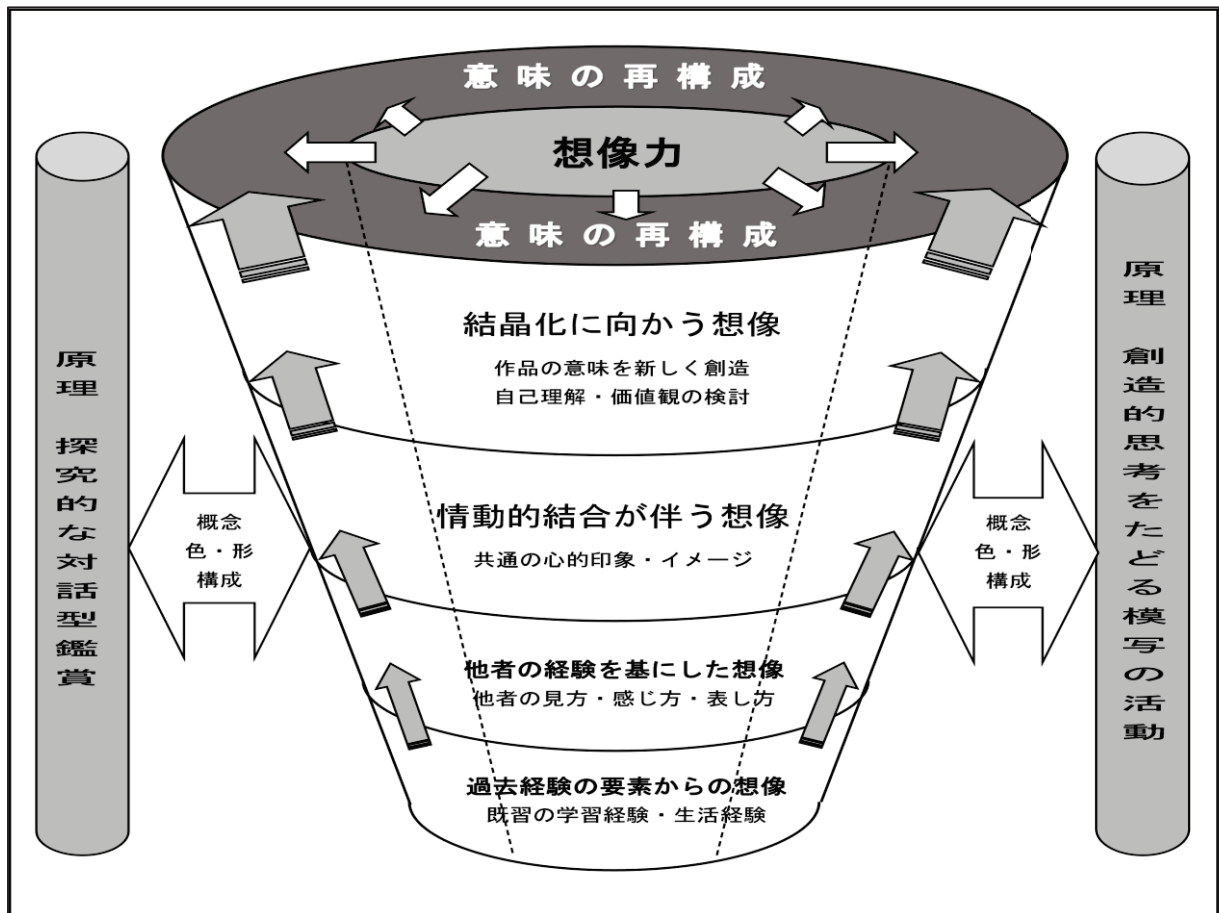


図1 鑑賞教育における想像力の発達構造図

児童の想像力を育むために、DBAE美術教育改革運動の中で行われたカリキュラム研究の成果の一つである、芸術に関する学問分野から導かれた色・線・形・構成などの「概念」に関して何を扱うべきかといった「原理」を学習の内容と方法の軸として、児童の生活経験と結びつける授業設計を考えた。

児童は作品鑑賞の際、これまでの学習経験や生活経験を再現的に思い起こし、自分自身の見方や感じ方で、主観的に作品に描かれた対象や状況を想像する。この段階に働いている想像力は、「過去経験の要素からの想像力」である。

次に造形作品に何がどのように描かれているのか、作品の色・線・形・構成など客観的な造形的特質に基づいて想起し、他者の見方や感じ方を踏まえながら、作品に描かれた対象や状況を想像し感情移入する。この段階に働いている想像力は、「他者の経験を基にした想像力」である。

さらに情動的思考を働かせて、作家の見方・感じ方・表し方を考えながら、形に表わせない印象を精神世界の表現として想像し、作家の精神世界や主題を想像する。この段階に働いている想像力は、「情動的結合が伴う想像力」である。

このような段階を経て、作家の精神世界や主題を想像することを通して、自己の生き方を見つめ生きる意味を新しく創り出すことのできる「結晶化に向かう想像力」へと発展するのではないかと考えた。

(2) 鑑賞教育において想像力を育む学習指導の理論

① 想像力を育む学習指導方法

具体的な学習指導法は、美術作家の創造活動に見出せる思考プロセスを児童に経験させる模写の活動を学習内容に導入し、本質的な問いを中心に据えた探究的な対話型鑑賞法の実践により児童の想像力を育むものである。学習構成として「初めの鑑賞→模写と鑑賞→終わりの鑑賞」を設定した。

② 想像力を育む鑑賞題材

想像力を育むために、ピアジェによる認知機能の発達段階とパーソンズによる美的経験の認知発達段階を参考に、鑑賞題材の選定基準を表1のように設定した。

表1 鑑賞題材の選定基準

① 児童の発達段階に適した作品
既習の学習内容や生活経験を再現的に思い起こし、描かれている題材から連想し、物語をつくったり、主観的に想像したりすることができる作品であること。
② 身に付けさせたい造形的特質を想像できる作品
客観的な造形的特質を手がかりに、作家の思いと作品との間に関係を認めたり、絵画に描かれた人々や状況に感情移入できたりする作品であること。また、発達段階に応じて学習させたい色・線・形・構成・表現様式や方法を考慮して選択する。
③ 作家の精神世界や主題を想像できる作品
作品に表された作家の精神世界や主題を想像できる作品であること。多様な文化の作品を発達段階に応じて選択する。
④ 子どもにとって人間の生きる意味を新しく創り出せる作品
作家の精神世界や主題を想像することを通して、自己の生き方を見つめ、生きる意味を新しく創り出すことができる作品であること。

児童の発達段階を踏まえて、低学年ではピーテル・ブリューゲルの『反逆天使の墮落』を、中学年では長澤蘆雪の『海浜奇勝図』を、高学年ではパブロ・ピカソの『ゲルニカ』を選定し検証授業を実践した。

4 研究デザイン

本研究では、評価指標を基に想像力の質的变化を分析し、開発した学習指導方法の有効性を検証するために、アクション・リサーチによる検証授業の分析及び検証を基に省察を加え学習指導の開発を行った。始めに予備研究では、仮説的に作成した想像力の評価指標をもとに、広島大学附属小学校（5年生）で検証授業を実践した。次に研究1では、研究仮説を立て直し、鑑賞題材を開発し、広島大学附属小学校（1・3・6年生）での検証授業を実践し、想像力の質的变化を分析するための評価指標を作成した。研究2では、学習指導法を改善し、研究協力者による公立小学校（1・3・6年生）での検証授業を実践し、評価指標に基づき児童の想像力の質的变化を分析し、学習指導法の効果を考察した。アクション・リサーチの実施においては、研究仮説を次のように設定した。

美術作家の創造活動に見出せる思考プロセスを児童に経験させる模写の活動を学習内容に導入し、本質的な問いを中心に据えた探究的な対話型鑑賞法を実践すれば、児童の絵画鑑賞における想像力の質的向上を図ることができるであろう。

5 鑑賞教育における想像力の評価指標

想像力の質的变化を分析するために、ブラウディの提唱する「美的知覚アプローチ」の「美的特質」を参考に、プレテスト・ポストテスト、ワークシートの記述内容を分析し、評価指標を表2と表3に示すように作成した。想像的特質と造形的特質の知覚レベルを別々に評価し、一人一人の児童が美的特質のうち、どの特質について知覚し想像力を働かせているかを分析し、授業前と授業後の想像力の質的变化を検証した。

表2 想像的特質の知覚レベルに関する評価指標

特徴	レベル	表記
イメージを膨らませることができない。	0	0
主観的に作品に描かれた対象や状況を想像することができる。	1	1
作品に描かれた対象や状況を想像し感情移入することができる。	2	2
作家の精神世界や主題を想像することができる。	3	3
作家の精神世界や主題を想像することを通して、自己の生き方を見つめなおし、新しく生きる意味を創り出すことができる。	4	4

表3 造形的特質の知覚レベルに関する評価指標

	特徴	レベル	表記
	造形的特質を知覚することができない。	0	①
題材的特質	作品に描かれている主要な対象を捉えられる。	1	①
	作品に描かれている主要な対象とともに従属的な対象を捉えられる。	2	②
感覚的特質	色や形の大きな特徴を捉えられる。	3	③
	色や形、線の特徴を詳細に捉えられる。	4	④
形態的特質	色の明暗や形の大小による構成の特徴を捉えられる。	5	⑤
	色の明暗や形の大小、対比による構成の特徴を捉えられる。	6	⑥
様式的特質	様式の特徴を捉えられる。	7	⑦

6 考察

想像力の質的变化を考察するために、研究1及び研究2のプレテストとポストテストの想像的特質の知覚レベルの平均値と造形的特質の知覚レベルの平均値を図2（低学年）、図3（中学年）、図4（高学年）に示した。

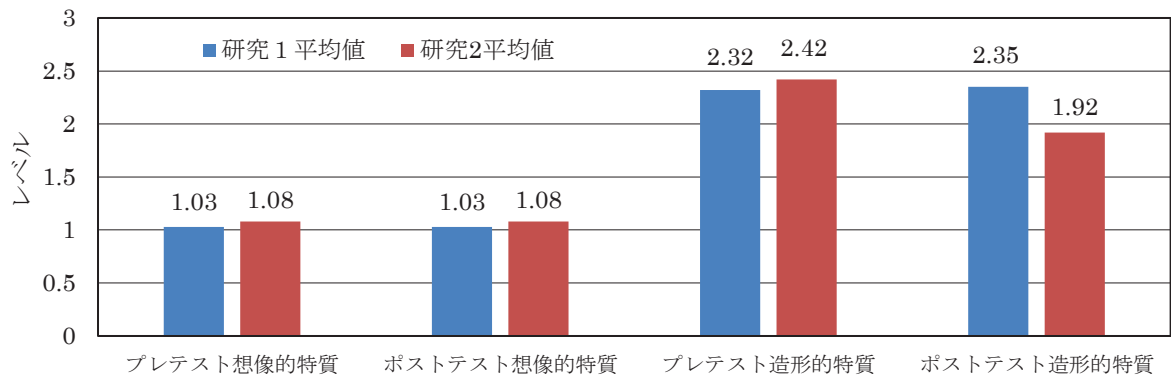


図2 低学年のプレテストとポストテストの想像的特質の知覚レベルの平均値と造形的特質の知覚レベルの平均値

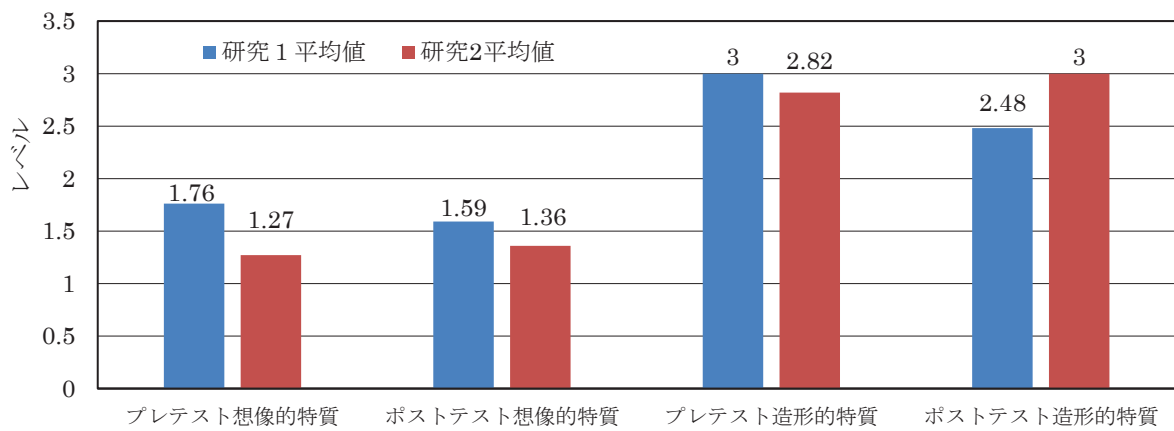


図3 中学年のプレテストとポストテストの想像的特質の知覚レベルの平均値と造形的特質の知覚レベルの平均値

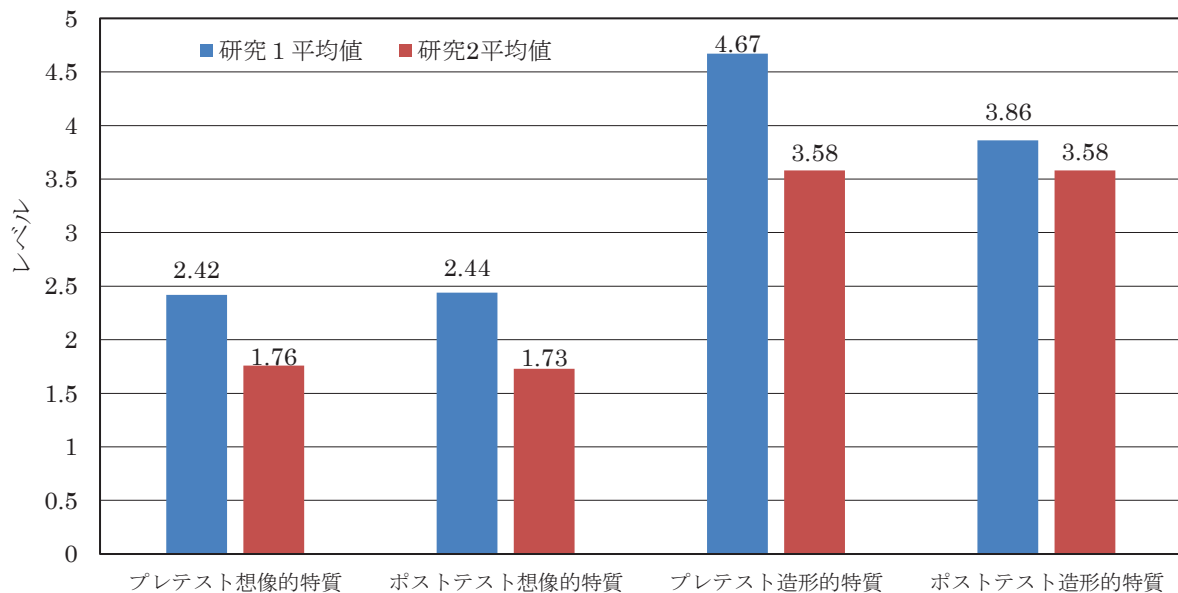


図4 高学年のプレテストとポストテストの想像的特質の知覚レベルの平均値と造形的特質の知覚レベルの平均値

アクション・リサーチの結果から、低学年の児童は、既習の学習内容や生活経験を再現的に思い起こし、作品に描かれている主要な対象や従属的な対象を捉え、主観的に対象や状況を想像する段階と考察した。中学年の児童は、既習の学習内容だけでなく、他人の経験による見方や感じ方を踏まえながら、作品に描かれた主要な対象や従属的な対象とともに作品の色や形の大きな特徴を捉え、主観的に対象や状況を想像するレベルから、対象や状況を想像し感情移入することができるレベルへの移行の段階であると考察した。高学年の児童は、既習の学習内容だけでなく、他人の経験による見方や感じ方を踏まえながら、作品の色や形の大きな特徴を捉え、作品に描かれた対象や状況を想像し感情移入することができるレベルから、作品の色や形、線の特徴を詳細に捉え、色の明暗や形の大小、対比による構成の特徴や表現様式を捉えながら、作家の精神世界や作品の主題を想像することができるレベルへの移行の段階であると考察した。

以上の考察を踏まえ、低学年・中学年・高学年の想像力の発達段階の構造と効果的な学習指導法を図5に示した。

7 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

本研究の成果は2点ある。1点目は、これまで曖昧にされてきた鑑賞教育において育むことのできる想像力を定義し、ブラウディの美的知覚アプローチの美的特質を基本に、児童のプレテスト、ポストテスト及び授業におけるワークシートの記述内容を分析し、造形的特質の知覚レベルと想像的特質の知覚レベルを関係づけながら評価する評価指標を作成し、アクション・リサーチを通して、鑑賞教育における低学年・中学年・高学年の児童の想像力の発達段階の特徴を明らかにしたことである。

2点目は、美術作家の創造活動に見出せる思考プロセスを児童に経験させる模写の活動を学習内容に導入し、本質的な問いを中心に据えた探究的な対話型鑑賞法を実践し、アクション・リサーチによる分析及び検証を基に省察を加え、児童の想像力の質的向上を効果的に図ることのできる学習指導法を図5のように示したことである。

(2) 今後の課題

児童の想像力のレベルを分析するために、想像力の評価指標を作成したが、妥当性の検証は不十分である。想像力の評価指標の妥当性を高め、誰でも活用できるようにするためには、更なる実践検証を基に精査する必要がある。

また本研究では、鑑賞教育において想像力を育むことを目的としていたが、表現活動においても意味の再創造に関わる想像力を育むために研究を進めたい。表現及び鑑賞の活動全般において想像力を育むことができるように、表現活動において育むことのできる想像力と鑑賞教育において育むことのできる想像力の関係を明らかにし、想像力を一体的に育むことのできる学習指導法を開発することが今後の課題である。

鑑賞題材についても、本研究では数点の絵画作品に限られていたので、他の絵画作品、あるいは多様な鑑賞題材の鑑賞においても、提案した学習指導法の有効性を検証する必要がある。学習指導法の汎用性を高めるためには、授業実践を繰り返し、学習指導法の改善を実施する必要がある。

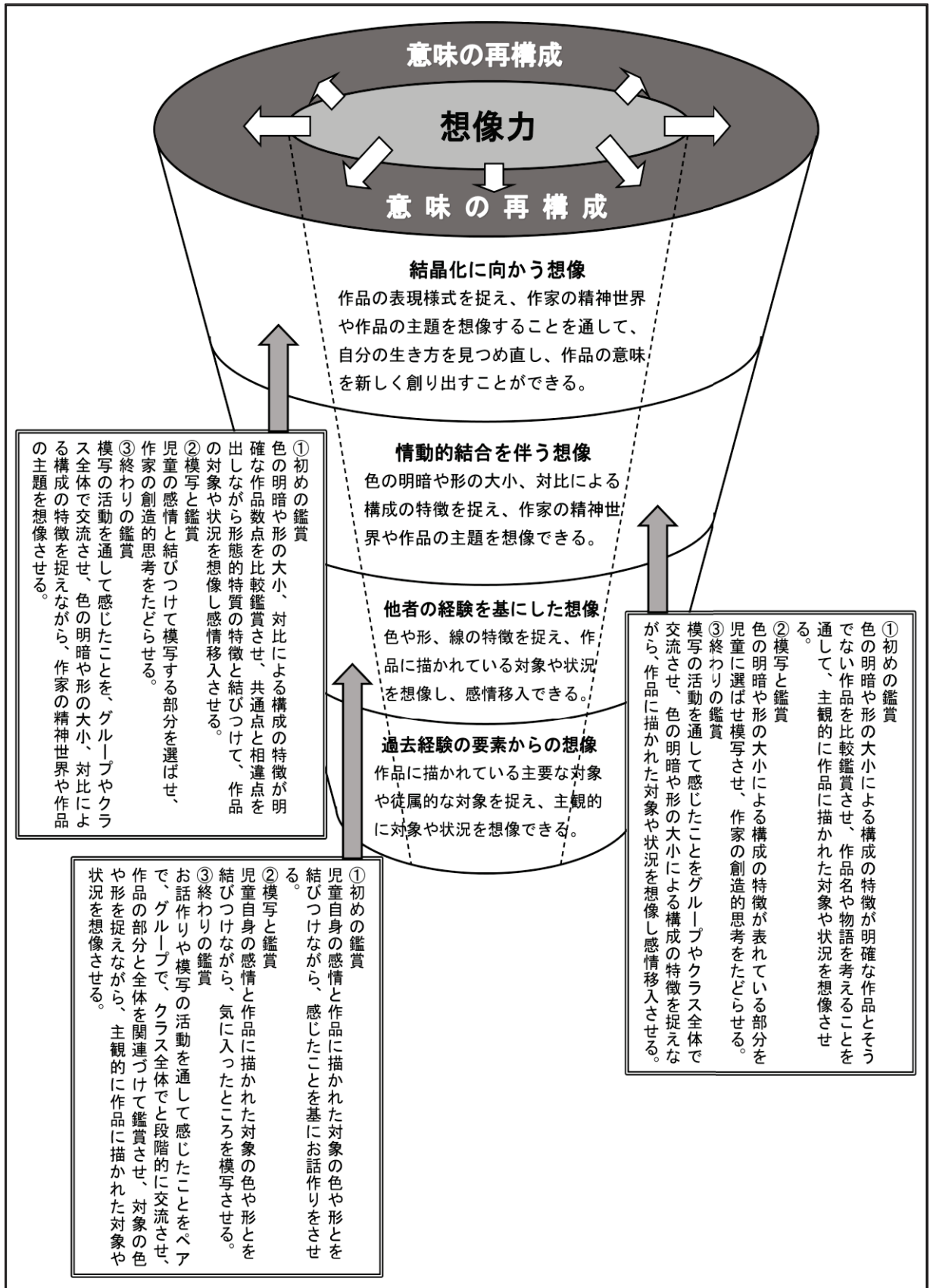


図5 鑑賞教育において育む想像力の発達構造図Ⅱ

主要参考文献

序章

- 今道友信、1982、『芸術と想像力』、東京大学出版会、pp.6-7
- 宮坂元裕、2016、『「図画工作」という考え方』、黎明書房、pp.43-46
- 「第5回学習基本調査報告書」、2015、ベネッセ教育総合研究所、pp.54-55、
<http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=4862>
- 柴田和豊、2000、「美術教育への問い」、花篤實監修『美術教育の課題と展望』、建帛社、pp.30-57
- 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(案)(第2部)」資料2-2、
2016、文部科学省教育課程部会、p.202、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm

第1章

- ふじえみつる、1990、「美術教育で何が教えられるか？—DBAE論争にみる問題点—」『愛知教育大学研究報告』、第39号、pp.213-226
- 中村和世、2002、「DBAE論にみられる2つの教育観の検討」『美術教育学会誌』第23号、pp.171-181
- 岡崎昭夫、1996、『現代アメリカにおける美術教育のカリキュラム開発に関する研究—ケッターリング・プロジェクトとCEMRELの美術教育プログラム』、筑波大学博士論文乙第1194号、p.58
- E・W・アイズナー (Eisner,E,W)、仲瀬律久訳、1986、『美術教育と児童の知的発達』、黎明書房 p.143
- J・デューイ (Dewey,J)、鈴木康司訳、1969、『芸術論 経験としての芸術』、春秋社、p.50
- 中村和世、2003、「H.S.プロウディの美的教育論に関する一考察」、『広島大学大学院教育学研究科紀要』、第1部、52号、pp.145-153
- 恩田 彰、1971、『創造性の研究』、恒星社厚生閣、pp.2-9
- 佐藤学、今井康雄、2003、『子どもたちの想像力を育む アート教育の思想と実践』、東京大学出版会、pp.22-23
- 竹内とも子、2014、「児童の創造性を育む造形活動の視点—版に表す造形活動を通して—」『美術教育学研究』、第46号、pp.157-164
- 石川 誠、1994、「鑑賞活動における想像力の関わりについて」『美術教育学』、第15号、pp.21-30
- フィリップ・ヤノウィン著、京都造形芸術大学・コミュニケーション研究センター訳、2015、『学力をのばす美術鑑賞』、淡光社、pp.10-43
- 上野行一、2014、『風神雷神はなぜ笑っているのか 対話による鑑賞完全講座』、光村図書、p.76
- 渡部晃子、2011、『米国における美術鑑賞教育の方法論：視覚的思考方略 (Visual Thinking Strategies) の理論と実践』、筑波大学博士論文甲第5798号、pp.212-237
- 長井理佐、2011、「VTSと学習支援—構成主義的学習における支援のあり方を巡って—」、『美術教育学』、第32号、pp.299-312
- 岡田匡史、2010、「対話型鑑賞、鑑賞能力(美的感受性)の発達、鑑賞批評メソッドの研究—読解的鑑賞の準備的論察—」、『美術教育学』、第31号、pp.139-150
- 本間美里・松本健義・新関伸也、2013、「対話による美術鑑賞授業における子どもの意味生成過程—知覚・語り・経験に着目した記述の試み—」、『大学美術教育学会誌』、第45号、pp.359-366

- 石橋健太郎、2011、『模倣による美術作品の創造の認知プロセス：大学生による描画の心理実験を通して』、名古屋大学博士論文、乙第 6938 号、pp.31-41
- 本村健太、2009、「ヨハネス・イッテンによる巨匠絵画の分析について—その理念・方法論と今日的展開の試み—」、『美術教育学』、第30号、pp.399-409
- 佐野真知子、2011、「対話型鑑賞法を生かした美術鑑賞教育の価値と実践への視座（その1）」『大学美術教育学会誌』、第 43 号、pp.156-157

第2章

- ヴィゴツキー (Vygotsky, L.S.) 著、広瀬信雄訳、福井研介注、2002、『児童の想像力と創造』、新読書社、pp.18-23
- ヴィゴツキー著、柴田義松、宮坂瑠子訳、2005、『ヴィゴツキー教育心理学講義』、新読書社、p.271
- ヴィゴツキー著、柴田義松訳、2006、『新訳版 芸術心理学』、学文社、pp.69-70
- 佐々木健一、1995、『美学辞典』、東京大学出版会、pp.48-49
- 島尾 新、2015、「『描き継ぐ』ということ」、『美術フォーラム 21 特集：模写と臨書』、31 号、醍醐書房、p.35
- W. ヴィオラ著、久保貞次郎・深田尚彦訳、1999、『チェゼックの美術教育』、黎明書房、p.18
- 山本 鼎、1982、『自由画教育』、黎明書房、p.37
- デューイ著、松野安男訳、1975、『民主主義と教育』、上巻、pp.63-66
- ジャン・ピアジェ、ベルベル・イネルデ著、波多野完治、須賀哲夫、周郷博訳、1969、『新しい児童心理学』、白水社
- マイケル・J. パーソンズ著、尾崎彰宏/加藤雅之訳、1996、『絵画の見方 美的経験の認知発達』、法政大学出版局

第3章

- 佐野正之、2000、『アクション・リサーチのすすめ』、大修館出版、pp.53-60
- 海保博之・原田悦子編、1993、『プロトコル分析入門』、新曜社、pp.37-50

第4章

- 中村和世、青山寿重、2013、「美的知覚力を高める図画工作科の鑑賞題材に関する研究開発」、『学校教育実践研究』、第 19 巻、pp.147-160
- 佐藤郁哉、2008、『質的データ分析法』、新曜社、p.96
- 中村和世、2012、「造形科における言語活動の目的、内容、方法を考える」、『学校教育』、広島大学附属小学校学校教育研究会、第 1145 号、pp.12-14